

# ある老人のつれづれ

牧草 泉

初秋、庭の柿が黄色に色づいている。芦刈竜彌は冬が苦手だ。若いときはなんともなかったが、定年退職して、急に寒さに弱くなった。老いたなあとと思う。冬が、そうして死が一步一歩迫りつつあるのをひしひしと感じている。

そんな中、知人から古典を学ぶ際の資料として唐詩選の一部をもらった。源氏物語や、枕草子の学習を深める一助になるということだった。彼は漢詩については高校で学んだこと以外は何も知らない。しかし、唐詩は胸に抱きしめたいほど好きだった。先生がとても情熱的で教え方がうまかったのだ。彼の高校時代に記憶に残る先生と言えば、日本史を習ったT先生とこの漢文の先生に絞られてくる。

T先生は担任でもあり、彼はこの先生には足を向けては寝られないほどの思いなのだ。彼が思春期の不安定な時代に、何かと支えてくれて、おちこぼれにもならず、さらには進学までも勧めてくれたのだった。教え方も、単に日本史をたどるというのではなく、各事件に対して問題提起がなされ、よく生徒に問いかけがあった。後になって考えると、弁証法的授業だったんだなと思ったことだった。彼は

ひと時もT先生の恩を忘れたことはない。「あの先生が担任でなかったら、今の自分はない」との思い一入である。さて、知人からもらった資料の中に杜甫の五言律詩「春望」があった。とたんに、高校時代の漢文の先生を思い出し、胸がキュンとなったのだった。朗々と唐詩を読む先生の姿が目に見えただのだ。名譽や肩書きなど栄耀榮華を一切棄てて教育に打ち込む先生だった。

「春望」

国破在山河  
烽火連三月  
城春草木深  
家書值万金  
感時花濺淚  
白頭搔更短  
恨別鳥驚心  
渾欲不勝簪

と、

感時花濺淚

恨別鳥驚心

この二行の書き下し文の一例を示すと、

「時に感じては、花にも涙を濺ぎ、別れを恨んでは、鳥にも心を驚かす」である。実は、彼はこれがベストな書き下し文だと信じていたのだ。理由は他愛ないものなのだ。つまり、漢文の先生から習った書き下し文が、これだったの

だ。この書き下し文で、杜甫の心情を汲んで大感激したのだ。（この書き下し文は、誰の作なのかは不明である）

ところが、参考にもらった「春望」を読んでみると、その書き下し文が、前記の二行は、

時に感じては、花は涙を濺ぎ

別れを恨んでは、鳥は心を驚かす

となっている。

「あれっ、これでいいのかな？ こういう解釈だと俄然内容が百八十度変わってくるぞ」つまり、あの杜甫の心情がマイナス・ベクトル化するのではないか、と思ったのだった。前者の読み方だと、主体的、主情的であるし、後者のような読み方をすると、傍観者的、ということになる。

そこで近くのF県立図書館に問い合わせたのだった。すると、この書き下し文の著者は吉川幸次郎ということがわかった。吉川幸次郎といえば中国文学の泰斗で京都大学教授だった。こうなると、「なんだ？ こんな書き下し文」というわけにはいかなくなるではないか。ここでふと、柳宗元の五言絶句「江雪」を思い浮かべたのだった。この詩はまさに傍観者的ではないか。

「江雪」

千山鳥飛絶  
万径人蹤滅  
孤舟蓑笠翁  
独釣寒江雪

この詩に加え、ロシア文学に通底している大地と人間の強い相互依存性、韓流ドラマ・映画に出てくる人物の死生観なども思い起こした。ロシア文学を読むと必ず凍土の中に人間が見える。ロシア人にとってはあの凍土は「母なる大地」なのだと思う。だから自らの死は「母なる大地」へ抱かれることなのだ。また韓流ドラマを見てみると、主人公が不治の病に罹ったとき、感情を爆発させて嘆き悲しむが、時間が経過すると達観した態度を見せる。そうして従容として死を迎える。日本人はどうか？ 死を目の前にすると、くじくじと嘆き悲しみ、そのまま達観することなく、諦観にも至ることなく死を迎える。極めて往生際が悪く、彼は大陸民族と島嶼民族の死生観が対極にあることを改めて思い知るのである。

このことから、吉川幸次郎の書き下し文でも十分いける、と思うようになったのだ。

特に、「花」は静的で、国が荒廃していくさまを目の辺りに一部始終を見ている。「鳥」は動的で、その荒廃を非連続的に見ている、鳥の驚嘆するさまが目に見えたいのである。

知人は、「恨別」の主語は「人」でないとおかしいと、吉川説を一笑に付したが、鳥を擬人化していると見れば、それほどの矛盾はない。しかしこの吉川説は一割の支持しかないということのようで、ちょっと残念な気がする。